

## 行動科学 (Behavioral Science)

人間が考えたり、感じたり、動いたりすること、また習慣や態度などを行動という。これを科学的に研究すること、あるいはそれによって得た知識の集積を行動科学という。科学的というのは、それらの人間行動を観察測定できる面にとらえ、法則化して予測可能な知識とすることで、人間個人のあるいは人間集団の、さらには社会の行動の計画的な変化を助けようとすることをいう。1940年代末アメリカの心理学者ミラー (G. Miller) が発表した『行動科学の一般理論にむけて』という論文において、人間の行動を科学的に研究するためには、生物科学と社会科学を総合しなければならないとし、これに含まれるものとして、人類学、生化学、生態学、経済学、遺伝学、地理学、歴史学、言語学、数学、神経病学、薬学、生理学、政治学、精神医学、心理学、社会学、統計学、動物学の18領域をあげた。これが現在の行動科学の概念の始まりと見られている。しかしながらそれが大きく発展したのは1950年代に入って、フォード財団が「行動科学計画」に向けて大きな資金援助を開始してからである。その範囲はアメリカ型の人類学、心理学、社会学を中心としたものであるが、考古学や形質関係の領域や心理学でも視覚や聴覚などを扱う領域は除き、さらに政治学、法学、精神医学、地理学、生物学、経済学、歴史学の領域で人間の行動に関連した部分を含めたものとされた。

行動科学は、まずは心理学を客観的厳密科学の方法で再編しようとした行動主義心理学が中心になり、刺激と反応およびオペラント条件づけで人間の行動を説明し統御しようとする考え方が主流であったが、やがて人間の行動については蓄積をもつ社会学や文化人類学も加わり、政治学も投票行動や政策の形成過程などを対象にするようになると、行動科学的とよばれることになる。経営

マネジメントなども行動科学の対象になる。さらには行動主義心理学も範囲をひろげ、主観や価値なども扱うようになり（人間的心理学）、人間行動の科学的基礎を提供しようとしている。

行動科学の展開に大きな役割を演じた基本的な理論の枠組みとしては、グループ・ダイナミックス、相互作用、行為システムや社会システム理論、社会学習理論などがある。

医療に関しては、生物学的な条件だけでは適切な治療ができないという認識から、病気原因に心理的な条件を求めるために行動科学の導入が図られた。特に慢性病では、患者自身の行動が病気の経過に大きな影響をもつことから、疾病構造の変化に伴って行動科学の意義が高く評価されてきた。このような患者の行動は、家族や職場、さらには医療環境によって変化する。医療環境では医療従事者の行動と相互作用をもつ。したがって、良好な関係をつくるためには、望ましい医療従事者の行動形態についての研究が必要である。それは医療者教育の目的や方法にも大きな寄与を行うことが可能だと認められて、欧米の保健医療従事者の教育には必須の科目として重要視されている。

（中川 米造／記）

---